

# くろぐみだより

第14号 平成26年 3月 13日

もう3月も中旬。年長さんは、まもなく卒園式です。

そんなタイミングで微妙に古い話題？なのですが、あらためて、生活発表会のことについて、ちょっとずつ書いてきた「くろぐみだより」を発行します。

今年には本番におほしさま2くみがインフルエンザで7名欠席、子どもたちの要望により14日に追加公演、ということで、「全行程終了」まで、例年より長い時間がかかりましたが、無事、終了いたしました。

こんなことを言うのもなんですが、発表会が終わって、例えばひとりで風呂に入っているとときとかに、思うわけです。

「いい発表会だったなあ…どの学年も、クラスも」

自分で言うなよ、って感じなんですけど、ホントなんだから仕方ない。

じゃ、どこがそんなに良かったのか。

そこって、けっこう、わかりづらい。そんな気がして。

書きたいと思います。

## 現代とくろぐ時代 (副園長)

今の世の中は、なんだか、とても複雑だ。

安くて美味しい食べ物に、危険な添加物が入っているかも？

予防接種、打つのは安全なの？逆に危険なの？

原発は危険そうだけど、無くなったまま日本はやっていけるの？

温室化ガス、いや寒冷化？

トクホ食品に発がん性、いやアスナルテーム？遺伝子組み換え？

複雑。難しい。めんどくさい。でも、健康のためには、いや子どものためには。

たくさんの方が、なにが本当か、よくわからないまま、悩んでる。

悩みたくない人は、考えるのをやめてしまう。諦めてしまう。

高度成長の「夢」を見ていた時代は、幻を追って、楽しかったのかもしれない。

単純な、「物質的な豊かさ」を目指して、その裏側の、環境破壊、絶滅動物、開発途上国での紛争、餓死する子ども。…「不都合で不幸な真実」には目を向けなかった。

みんな浮かれて、バブル経済。スキー、ディスコ、高級車、三高、ヤンエグ、トレンドィ。マジメはネクラ。ネアカになろうぜ！

懐かしい時代？ でも、それはホントに過去のこと？

泡沫のはじけるその日まで、続いた夢が、その後も、今も、私たちが幻の中に閉じ込める。

リーマンショックのそのあとも、まだ成長社会の夢の中。

日本は成長する。経済は成長する。成長するためには何かいる？

労働力！エネルギー！効率性！

そうだ、母親にも長時間働いてもらおう。原発も必要だ。農業だって。

成長の夢。幻ではなくて？

その裏側には、同じものを持ったまま。

「不都合で不幸な真実」

今、複雑でわかりにくい社会の、反動のように、人々は難しく考えるのをやめ、単純なものを求める。

金だったり。地位だったり。光って綺麗なものだったり。

単純なもので、自分を確かめる。単純なもので、他人と比較する。

格差社会。お金持ちとそうでない人。

そこに生まれる「勝ち組」「負け組」なんて言葉。

生きにくい時代。

日本の自殺者数は年間、約3万人。遺書などのない「変死」が10万人以上。紛争地帯の戦死者より多いかもしれない死者数。そう、ここは、「平坦な戦場」。

そんな時代の今、あさひこ幼稚園の保育、幼児教育の目指すところは、ハッキリしています。

あさひこ tweet…

(予行で、緊張感から舞台上で大暴れした年中児、その後担任に)

「ああ…また変な踊りしちゃった…

恥ずかしかった…」

(わかっちゃいるんです。けど、やめられません)

幼児ひとりひとりの、自らによる、「自己肯定」です。「自分が大好き！」

それは、みなさんが入園前に手にした「入園案内」の文章から、何一つ変わらぬ私たちの思いです。

「卒園式の日、そしてそれからずっと、すべての子どもたちが、『ぼくって、わたしって最高♪』。そんなふうに、人生を歩んでいけるような人になってほしいと心から願っています。

喜びに満ちた人生とは、富や、地位といった、人との比較によるのではなく、今ある自分を卑下することなく、自信を持って生きていくことだと思います。」

6歳以降の人生に起こってくる、他者との比較、順位付け、収入格差。

それらすべてに、揺らぐことはあっても、それでも負けない、「自分は素晴らしい！」という、生涯続いていく感性を獲得すること。

それが、字が書けることより、そろばんができることより、クローラができることより、鍵盤が弾けることより、英語が喋れることより、ずっと大切な、幼児期の、「今しかできない育ち」だと信じています。

私たちにできることは、ただそのために、「純粋に」、保育をするだけです。

## 生活発表会とは？ (副園長)

「3歳児だって、猿軍団より賢い。調教すればどんな芸でもできる」

しかし、僕たちはやりたくない。

「できる」「できない」を、子どもたちを見る基準にしたくない。

保護者や先生、大人を満足させるための、高等な芸を調教された子どもなんて。

あさひこの発表会はわかりにくいと思います。「商売」だとしたら、こんなことはやりません。もっと「客」が喜ぶようなことをします。でも、子どもは商品じゃないし、保護者は客じゃないから、これでいいと思ってやっています。

その時期の育ちの姿を、ありのままちゃんと、見て欲しい。

それでも、年長はまだ、わかりやすいかもしれません。本番、その年齢の発達を、ある程度、形の上でも見せてくれるから。

しかし、年少、年中は、「発表会をどう見るか」が、本当にわかりにくいだろうと思います。当日だけ見れば、「なんだかよくわかんなかったね、でもかわいかったね」「自由に子どもが楽しんでるなあ」というくらいなんじゃないかなあ、と思います。

年少は、保育室で遊んでいる「表現遊び」を、舞台上でやります。当日、お客さんの雰囲気にも子どもが緊張することはあっても、「お客さんに見せる」なんて意識はまるでありません。まさに「遊びの現場」そのものを、あの舞台上でやっているのです。

だから、本番以前に、「練習」は一切ありません。本番、あの舞台上で行われた遊びは、当日、ほぼ初めて遊ぶ内容です。

発表会に至るまで、舞台上で遊ぶたびに、毎回違う内容で、何かになりきったり、表現をしたりして楽しんでいました。だから、発表会は、毎日毎日、大好きな先生と、友達と、くりかえし自由に表現してきた姿を見ていただいています。

ただ、当日の特別な雰囲気に加え、子ども側には台本も筋書きもないだけに、全学年でもっとも「当日の姿が予想できない」学年でもあります。

先生は、どうやったら毎日、飽きることなく、子どもたちが心から楽しんで表現遊びができるか、題材、声かけ、ピアノ、いろいろなことを考え続けます。

年中は、本番行われたものは劇だけれども、それは、はじめから「発表会だから、劇をやろう」という意識をもって作られ、行われたものではありません。

はじめに、日常の保育の中で、そのお話を素話(絵本や紙芝居を使わず、先生の語りだけで物語を伝える形式)で聞いて、その話の登場人物になりきって遊んでいきます。そして、お話のどこかのシーンを、自分たちで考えてやってみて遊び、遊びながら作戦(どうやったら〇〇できるか?)や気持ちを考え、だんだん、それが「クラスで作ったお話」になっていきます。

そこでやっと、「みんなの作ったお話をつなげたら、お話が全部できちゃうん

じゃない？」となり、全部をつなげて遊んでみて、ここで初めて「劇ができちゃった！」となるわけです。

そして「みんなで作った劇」を、発表会の予行（本番6日前）で初めてお客さんに見せ、ドキドキしながらも「劇を見せる」ということの楽しみを感じ、「次はおうちの人に見せたい！」「じゃあ、発表会で〇〇組の劇をやっておうちの人に見せよう！」となっていく。この予行練習後、初めて、「自分たちが楽しんできたお話」から、年中なりに「お客さんに劇を見せる」ことを意識していき、「もっと楽しくしたい」「そんなことするとお話がわかんなくなっちゃう」という思いが出てくるのです。そうして、本番、「自分たちでつくった自分たちのすてきな劇を見せたい！」という思いになるわけです。

もちろん、まだまだ年中さん。雰囲気緊張してしまったり、テンションが上がってしまったりといった理由で、当日はいろいろな姿が見られますが、そうやって「自分たちで気持ちを向けて劇を作って、やった！」という素敵な経験を、本当に素晴らしいこととして受けとめていただけたら、と思うのです。

年少、年中、年長、ともに一貫して言えるのは、「これは劇の発表ではなく、生活の発表だ」ということです。「発表会」という、「保護者に何かを発表する会」で、「劇」ではなく、「生活」を発表するという。子どもの毎日の、決して派手ではない地道な生活の中での育ちや、その姿を見てもらう「生活発表会」です。

僕が、「いい発表会だった」と自画自賛するのは、まさに今挙げたことによるのです。きちんと、「生活」を発表した。

それは、形の上でできることを見せるのではなく、本当に、毎日の生活の中で子どもたちが、「やらされて、やる」のではなく、自分から「やりたい！」と思える主体的な活動だけ、つまり「遊び」だけ、「それだけ」をやってきた、その毎日の中で経験してきた姿を、発表する会。それが生活発表会です。

発表会の舞台に立つ、その経験で、子どもたちが「やったぜ！」「楽しかった！」「がんばった！」と達成感を得て、さらに育っていく。そこに向けて、毎日毎日を純粋に積み重ねる。

これは、正直、簡単なことではありません。

これだけは、ハッキリ言えます。「劇をやらせる」ほうが、「子どもが形の上で劇をできるようにする」だけでよければ、そのほうが、保育者にとって、どれだけ楽か。「アメとムチ」で、あるいは、子どもから担任への信頼関係や好意を利用して、子どもに「やらせる」、そんな「指導」、そんな保育の「手」を使って劇を作るほうが、どれだけ簡単か。どの学年でも、です。

「やらされてやったこと」で結果的に達成感を得る、ということもあるでしょう。そのことすべてを否定しません。年齢によっては、そういう経験も、あっていいと思います。

しかし、私たちの目指すもの、幼児期に期する育ちのために、もっと必要な、より純度の高い経験、そのための保育は、子どもが「やらされてやる」ことではないと考えています。

だから毎日、純粋に、保育をする。子どもが、「やりたいことをやる」毎日を。

そのことを、全職員が理解し、方向性をずらさず、やり通しました。若い先生も、ベテランの先生も、みんなです。誰もが余裕なく、同じように必死に、純粋に。このことを、僕はとても誇りに思います。

「自分（たち）でやった！」「自分（たち）で作った！」

「誰に言われたんじゃないかって、『自分が』やりたかったから、やった！」

自分の生き方を、自分のやりたいことを、自分で決めて、自分で考えて、自分でやった。

大げさじゃなくて、そうやって過ごす地道な毎日が、どれだけ大切か。

自己主張して、葛藤もして、喧嘩もして。

そして、達成感。

自分って最高だ。

私たちが目指す子どもの内的な発達、育ちは、わかりにくいのです。

「〇〇ができた」という、外から見てわかる評価でザク切りにして、育った、育ってない、なんて評価は、わかりやすいだけで、ちっとも大事じゃない。

わかりにくいこと、複雑なことの中にある大事なものに向かい合い、きちんと大事にする。

結果だけを見て判断するんじゃない、もしくは、判断されるのを恐れるんじゃない、そこに至るまでの「過程」を最も大切にする。（「過程」こそが保育です）

「〇〇ができた」という見た目だけの、単純な比較による評価じゃなく、難しいけど、ややこしくて複雑だけど、「ひとりひとりの内的な育ち」を大切に、ひとりひとりが「自分が大好き！」と思えるように。

複雑で難しい現代だけど、その中において、すべての子が、単純な比較に頼らなくていい、揺らがなくていい、勝ち負けや優劣なんかを条件としない、絶対の、確固たる「自分が大好き！」を獲得していけるように。

私たちは純粋に保育をしてきました。

子どもたちは、とても楽しそうでした。

だから、「いい発表会だったなあ…どの学年も、クラスも」と思うのです。

そして年長の劇は、その3年間の育ちを証明するかのようだったと思います。その年長の劇も、あのすべてを「自分たちで作る」ことができたのも、年少と年中の、上記に挙げたような地道でたくさんの「やりたいからやった！」「自分たちでやった！」という経験があったからです。

本当にいい発表会でした。

とても、純粋でした。

年長は、まもなく卒園。とてもさびしいですが、年少、年中、それらの経験を踏まえて、本当に大きくなった子どもたち。積み重ねた3年間。

自信を持って、誇りを持って、送り出すことができます。

私たちは、これからもずっと願うでしょう。

どれだけ記憶が薄れても、あの子達がずっと、幼いころその胸の奥深くに感じてきた、「自分が大好き！」という自信を、なくさずにすごしていけますように。ずっと幸せでありますように。

願い、祈っています。

## 教育課程

### 【教育目標】

「心身ともに旺盛に活動し、家庭では父母の愛情に包まれて心を充足させる。こうした心地よい生活のリズムをベースに、決して指示待ちではなく、状況に応じて自分で判断して生活しながら達成感を積み重ねることのできる子どもの育ちを期す」

「生活や遊びのなかで、友だちを中心としたいろいろな人々とのかかわりを通して、やさしさ、思いやりの心が育つ。どんな人間も、それぞれその人にしかない個性を持っているということに、友だちとのかかわりのなかで気づいていく。大人の固定概念にとらわれた表層的、表面的な“よい子”を押し付けることなく、喧嘩もする、自己主張もするという友だちとの葛藤体験の先に、個の尊厳を見出せる子どもの育ちを期す」

「心身両面にわたって、間接的な知識や、相対的な技能の習得のみを教育の目標にしてはいけない。むしろ性急な大人の欲目は子どもの育ちの芽を摘むことさえある。子どもは何度も試行錯誤を繰り返しながら、環境との相互作用のなかで育っていく。子どもが自ら遊びを見つけ、のめりこみ、主体的に取り組める空間と時間を全的に保障し、その先に工夫する力、創造する力、自己課題を見つける力の育ちを期す」

### 【教育方針】

「遊びを中心とした、子どもにふさわしい生活が実現できるようにすること」

「子どもが自己課題を持って、身も心も開放して遊びこむことができるようにすること」

「子どもが感性を活発に働かせることができ、直接体験を基本とした遊びや生活、人とのかかわりが豊かに体験できるようにすること」

「子どもが友だちや保育者、加えて保護者、地域の人々と豊かにかかわることができ、葛藤しながらも共感を体験できるようにすること」

「子どもが自ら生活を営むことができ、挫折しながらも達成感を積み重ねて、自立的な生活の喜びを感じるできるようにすること」